

終助詞「な」の使用に見る日本語の談話*

Naomi Ogi, Australian National University
Naomi.Ogi@anu.edu.au

要旨

This paper discusses the interrelationship between language and the identity of the speaker including gender, age and social status by examining the interactional function of a Japanese sentence-final particle *na*. It is well known that the particle *na* has similar functions to *ne* which is one of the most frequently used among sentence-final particles, while it differs from *ne* in a way that its use has some restrictions in terms of the speaker's gender, age and social status: for example, *na* is used by male speakers only; when *na* is used with the polite form *desu/masu*, it indicates that the speaker is an aged male with a certain social status. To date, however, little research has systematically examined the mechanism of how *na* indicates the speaker's particular gender, age and social status.

This study provides a comprehensive account for the unexplored usages of *na* and sheds light on some aspects of the nature of the language-identity interface as to how the speaker's identity can be presented through the use of language. The study will claim that the indication of the speaker's gender, age and social status is not a genuine property of *na*. Rather, the particle has the function that indicates the speaker's attitude of sharing 'camaraderie' with the hearer, in addition to its 'incorporative' function, and this 'camaraderie' function in connection with sociocultural values on gender and formality in the Japanese language is the primary factor that restricts its use with regard to the speaker's gender, age and social status.

キーワード

終助詞「な」、情報・感情共有機能、仲間意識共有機能、ジェンダー、フォーマリティー

1. はじめに

日本語の会話において終助詞の果たす役割は極めて大きく、McGloin (1990) や Katagiri (2007) などでも指摘されるように、終助詞を使用せずに会話するのは時に不

* This paper was presented to the 18th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia at the Australian National University from 8th to 11th July 2013 and has been peer-reviewed and appears on the Conference Proceedings website by permission of the author who retains copyright. The paper may be downloaded for fair use under the Copyright Act (1954), its later amendments and other relevant legislation.

自然であり、ほとんど不可能に近い。本稿で取り上げる「な」¹も例外ではない。しかしながら、「な」は終助詞「ね」との比較で言及されることが多く、「な」は「ね」と類似した機能を持つが、一般的に男性に使用されることや、目上の者には使えないこと、丁寧体に接続する場合には話し手は年配の男性に限られることなど、「な」の使用が「ね」と異なり話し手の特定の性別や年齢などを示すという事実が指摘されるにとどまっている（陳（1987）、宮崎等（2002）、Asano（2003）など）。例えば、以下の例(1)は、「ね」と「な」の異同を端的に示すものと言えるであろう。

(1) A と B がレストランで食事をしている場面での A の B に対する発話

- a. これおいしいですね。
- b. これおいしいですな。

先行研究で指摘されるとおり、「ね」も「な」も、同じ命題「これおいしい」と丁寧体「です」に接続し、さらに A の B に同意を求める態度を示している点で、互いに類似した機能を持っていると言える。明らかに、異なる点は、(1b)は、A が年配の男性で、ある程度の社会的地位がある人物であるということを示すのに対し、(1a)はそういった情報を示さない点である。

では、「ね」と「な」の違いは単に話し手のアイデンティティーを特定するか否かなのであろうか。本稿では、これまで議論されてこなかった「な」の使用と話し手のアイデンティティー表示の関係性に焦点を当て、話し手の性別、年齢、社会的地位表示は「な」の本質的機能として備わっているわけではなく、「な」特有の談話機能が日本語におけるジェンダーやフォーマリティーに対する社会文化的価値と密接に関わることで、話し手の性別、年齢、社会的地位の表示に結びついていることを明らかにする。

本研究の考察対象は標準語（東京語）であり、データは自然会話コーパスと日本人に広く読まれている漫画「タッチ」と「花より男子」である²。本研究が特に会話、さらに話し手の性別や、話し手と聞き手の年齢や社会的地位、場面のフォーマリティーのレベルと深く関わっていることから、自然会話だけでなく、漫画も有用なデータとして使用した。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節では「な」の一般談話機能を、次の第3節では「な」の固有談話機能を明らかにする。さらに、第4節では「な」の固有談話機能と話し手の年齢・社会的地位表示との関係、第5節では「な」の固有談話機能と話し手のジェンダー表示との関係について、それぞれ論じる。最後に、第6節で、前節の議論を概観し、結論を述べる。

¹ 「な」は独話でも用いられる（陳（1987）、McGloin（1990）、宮崎等（2002））。しかし、本研究は「な」の談話機能と話し手のアイデンティティー表示との関係性を分析することを目的としていることから、独話で使用される「な」は考察の対象とせず、聞き手に向かって用いられる「な」のみを対象とする。

² 本稿を通じて、データは「タッチ」は「T」、「花より男子」は「HD」、自然会話コーパスは「NC」と表示する。それぞれの後にある番号は巻番号もしくは会話番号である。

2. 「な」の談話機能

2.1. 一般談話機能：情報・感情共有機能

前節でも述べたとおり、「な」の機能が「ね」の機能と類似していることは多くの先行研究で指摘されており（Uyeno (1971)、McGloin (1990)、伊豆原 (1996)、宮崎等 (2002)、Asano (2003)）、本研究もその点で異論はない。まず、本節では、Lee (2007) の「ね」の談話機能に関する研究を応用し、「な」の一般談話機能を考察する。

Lee (2007) は、Involvement (Arndt & Janney (1987)、Daneš (1994) など) という概念を用い、「「ね」は話し手が聞き手と発話の内容や発話に込められた感情を共有しようとする態度を示すことで、聞き手を会話に取り込む機能を持つ」と述べている。次の例(2)は、「ね」が接続しない発話と接続する発話の違い、つまり、「ね」の機能をよく示すものと言えよう。

(2) a. 映画おもしろかった。

b. 映画おもしろかったね。

これら 2 つの発話はどちらも同じく「話し手の映画に対するおもしろかったという評価」を伝えるものだが、話し手の聞き手に対する異なった態度を示している。「ね」が接続しない(2a)は、特に話し手の聞き手を会話に取り込もうとする態度を示さず、話し手の評価を一方的に伝達する態度を示している。よって、聞き手の存在を前提としない独話でも用いることが可能である。一方で、「ね」が接続する発話(2b)には、話し手が聞き手と自分の評価を共有したいという態度（私は映画がおもしろかったと思うけど、そう思わない？）を示しながら、聞き手を会話に取り込もうとする積極的な態度（Involvement）が見られる。当然、このような発話は聞き手の存在を前提とする会話の中でしか用いられず、終助詞が一般的に書き言葉ではなく、会話で使用される（Uyeno (1971)、Maynard (1989)、Katagiri (2007)、Ogi (2012)）理由もここに依拠すると考えられる。このように、終助詞の接続は、話し手の聞き手に対するある特定の態度を示すことで、聞き手を会話に取り込もうとする態度を有標にする談話機能をもつものと考えられ、「ね」は特に「話し手が聞き手と発話の内容や発話に込められた感情を共有しようとする態度」を表す終助詞と見ることができる。

では、「な」は話し手のどのような態度を示すのであろうか。以下の例にも見られるように、「な」で示される話し手の態度は、「ね」で示されるそれと同じであることが分かる。

(3) A: カラオケ行ってないな。

B: 行ってないね。 (NC5)

会話(3)では、A がまず、「B としばらくカラオケに一緒に行っていない」という文に「な」を接続させることにより、その事実と、またいつか一緒に行きたいという気持ち

を B と共有しようという態度を表している。もし、ここで「な」が接続しなければ、A の発話は単に「B としばらくカラオケに一緒に行っていない」という事実を述べるにとどまり、A の共有態度を示さないだけでなく、聞き手を特に会話に取り込もうという態度も示さない。B は「A としばらくカラオケに一緒に行っていない」という事実「ね」を接続させ、それを A と共有しようという態度を示すことにより、A の発話に同意を示している。この場合もまた「ね」が接続しなければ、B の共有態度を示さないため、単に「行っていない」という事実を繰り返して述べるにとどまり、A への同意は示さなくなる。このように、「な」も「ね」と同様に、話し手の聞き手と発話の内容や発話に込められた感情を共有しようとする態度を示すことで、聞き手を会話に導く機能があることが分かる。実際、下の例(4)のように、会話(3)の A が使用した「な」を「ね」に、B の「ね」を「な」に置き換えても、A と B の共有態度が示されることから、(3)と会話の文脈も聞き手の会話への取り込み方も変わらない。

(4) A: カラオケ行ってないね。

B: 行ってないな。

もう一つ「な」の例を見てみよう。例(5)は、話し手が朝自分のガールフレンドを置いて、先に学校へ行ってしまったことをそのガールフレンドに謝罪する発話である。

(5) 今朝は先に行って悪かったな。 (HD20)

話し手はただ「今朝は先に行って悪かった」という謝罪を述べるのではなく、謝罪文に「な」を接続させることで、ガールフレンドに自分の謝罪を共有してほしい（つまり、自分が悪いと思っていることを分かってほしい）という気持ちを表し、積極的にガールフレンドの会話への参加（つまり、謝罪に対する応答）を促している。

以上のことから、「な」の一般談話機能は以下の(6)のようにまとめられる。

(6) 「な」の一般談話機能

話し手が聞き手と発話の内容や発話に込められた感情を共有しようとする態度を示すことで、聞き手を会話に取り込む。

以下の 2.2 では、この「な」の一般談話機能がもたらす効果について考察する。

2.2. 「な」の一般談話機能によってもたらされる効果

ここでは、上の(6)にある「な」の談話機能が、会話場面でどのような効果を生むのかを、「ね」の効果と並行して明らかにしていく。

2.2.1. 語調の強弱に及ぼす効果

まず、語調の強弱に及ぼす効果について考察する。先行研究でよく指摘されるのは、「な」と「ね」は依頼文の語調を和らげる効果がある一方で（伊豆原（1996）、宇佐美（1997）、Asano（2003）、Lee（2007））、否定文の語調を強める効果があるということである（神尾（1990）、蓮沼（1998））。しかし、なぜ一つの終助詞「な」または「ね」が文の語調を弱める・強めるという相反する効果を発揮するのかはこれまで統一的に説明されてこなかった。そこで、以下にこれらの効果を「な」と「ね」の Involvement と情報・感情共有機能の側面から説明したい。

まず、依頼文の語調を和らげる効果について見てみよう。伊豆原（1996）は例(7)を提示し、「な」が接続する(7b)は接続しない(7a)に比べ、依頼の語調が弱いと指摘している。同様に、Lee（2007）は(8b)の「ね」が接続した依頼の方が(8a)に比べて和らいだ印象を与えると述べている。

(7) a. ちょっと見てください。

b. ちょっと見てくださいな。 (伊豆原（1996: 75）)

(8) a. 明日早く来てください。

b. 明日早く来てくださいね。 (Lee（2007: 383）)

Lee（2007）は「ね」のケース(8)について次のように説明する。(8b)の場合は、接続した「ね」が話し手の聞き手を会話に取り込もうとする態度（Involvement）を明示することで、話し手が聞き手の存在を認め、一緒に会話を続けていきたいという気持ちを表すことになり、そのような話し手の聞き手に対する配慮が、発話（依頼）の語調を和らげていると解釈される。それに対し、「ね」が接続しない(8a)は、特に話し手の聞き手に対する配慮を示さないため、結果的に(8b)より形式ばった固い依頼として解釈される。これは「な」のケースにも当てはまる。「な」を接続することで、(7b)は話し手の聞き手に対する配慮を示し、「な」を欠くことでそれを示さない(7a)よりも依頼の語調に和らいだ印象を生み出すのである。

次に、否定文の語調を強める効果について見てみる。例えば、神尾（1990）は例(9)のBの否定が「ね」を接続することで強められていると指摘する。

(9) A: どう、一緒に行かない？

B: いや、俺は行かないね。 (神尾（1990: 76）)

この否定を強める効果は「ね」が示す情報・感情共有態度に関係していると考えられる。(9)はAがBと一緒にいこうと誘う発話に対し、Bがその誘いを断る場面である。当然、Aの誘いはBの同意「行く」を期待してのものであるが、それに対してBはただ「行かない」と断るのではなく、「ね」を接続することで、その断りまたは断る気持ちをAと

共有したい、A も分かるだろう、認めてほしいという態度を加えている。このような断りを認めさせようとする B の態度が A には押し付けとして解釈されると思われる。

これは、次の例(10)の「な」が接続した否定文にも当てはまる。

(10) A: 俺だよ。おまえにあご殴られた。。。覚えてるか？

B: 知らねえな。

(HD15)

(10)は、A が自分を以前に殴った B が自分を覚えているかと質問し、B が A を覚えていない（知らない）と答える会話である。先の(9)と同様に、A は質問した時点で、B が当然自分を覚えているだろうという期待をしていることが感じられる。それに対し、B は「知らねえ」と言うだけでなく、「な」を接続し、A に「知らない」ということを認めよ、つまり、「知らないことぐらいおまえにも分かるだろう」という態度を示している。この「認めよ」という B の態度が、単に「知らない」という事実を述べるよりも、強い否定となって現れるものと思われる。

ここで、「な」と「ね」の語調の強弱に及ぼす効果についてまとめると次のようになる。まず、これらの終助詞は、話し手の聞き手を会話に取り込もうとする態度（*Involvement*）を明示することによって、話し手の聞き手への配慮を示し、それが、これらが接続しない発話（聞き手への配慮を特に示さない発話）よりも和らいだ語調に聞こえる効果を生み出している。しかし、いつでもそのように解釈されるわけではない。

「な」と「ね」が示す情報・感情共有態度によって、これら終助詞の使用が、話し手の言っていることを聞き手に理解させよう、認めさせようといった聞き手に対する押し付けとして解釈されることもあり、それが、これらが接続しない発話に比べて強い語調に聞こえる効果を生み出しているのである。

2.2.2. フォーマリティーレベルに及ぼす効果

「な」及び「ね」の効果で、もう一つよく指摘されるのは、これら終助詞はフォーマルな会話よりインフォーマルな会話でより頻繁に使用されるということである（Uyeno (1971)、Cook (1992)、Maynard (1993)、伊豆原 (2001)）。この現象についても、「な」と「ね」の *Involvement* と情報・感情共有機能の側面から一貫して分析することができる。

まずここで述べておきたいことは、話し手は、フォーマリティーのレベル（場面がフォーマルか否か、聞き手と親しいか否かなど）によって言語の形式や言い回し（丁寧体や敬語を使用するとか、普通体を使用するとかなど）を選択するだけでなく、聞き手に対する態度や感情の表し方も選択しているということである。例えば、Lee (2002) でも述べているように、話し手は聞き手と親しい関係（インフォーマルな関係）にあるときの方が、より直接的に強く態度や感情を表す傾向がある。このことを踏まえ、先ほど見た例(7)、(8)、(9)、(10)をもう一度思い出してもらいたい。(7)と(8)では、「な」と「ね」が話し手が聞き手を会話に取り込もうとする態度（*Involvement*）を明示し、一緒

に会話を続けていきたいという気持ちを表すことを見た。また、(9)と(10)では、これらの終助詞が、話し手の聞き手と情報を共有したい、共有してほしいという態度を示すことを見た。このことから分かるように、これら終助詞の使用が、語調を弱めるのであれ、強めるのであれ、話し手の気持ちや態度を、これらを使用しない発話に比べ、直接的に強く表現していることは明らかである。上述のように、こういった直接的で強い感情・態度表現は一般的に話し手が聞き手と親しい関係のときによく見られることから、「な」と「ね」の使用は、聞き手と親しい関係にあるので、そのように感情や態度を直接的に強く表しても問題がないという話し手の判断の表れだと言えよう。このことが、まさに「な」と「ね」がフォーマルな会話に比べインフォーマルな会話でより頻繁に使用される要因なのである。

さらに、過去の研究で、これら終助詞の使用が語調をフレンドリーにさせると指摘しているが（伊豆原（1996）、今尾（2000）、Asano（2003））、これも終助詞がもたらすこういった効果に起因するのである。以上のことから、次の例(11)の就職面接のような特にフォーマルな会話では、被面接者が「な」や「ね」を使用することはあまりない。

(11) 面接官：筆記試験はどうでしたか。

被面接者：a. ちょっと難しかったです。

b. ?ちょっと難しかったです な/ね。

(11)は面接官の就職筆記試験が難しかったかという問いに対し、被面接者がちょっと難しかったという感想を述べている場面である。その感想に「な」や「ね」を接続すると、話し手のフレンドリーな態度を示してしまうことから、例え「ちょっと難しかったです」と丁寧体を使用していたとしても、丁寧さに欠ける失礼な発話と解釈されてしまうだろう。

3. 「な」の固有談話機能：仲間意識共有機能

第2節では「な」の一般談話機能とその会話場面における効果について見てきた。この第3節では、共有機能において、さらに「な」だけが持つ固有の談話機能について述べたい。先にも述べたように「な」は話し手のアイデンティティ表示と深く関わっており、特に以下の3点がこれまでの研究でも指摘されている。

- (i) 「な」は男性にのみ用いられる（Uyeno（1971）、陳（1978）、McGloin（1990）、伊豆原（1996）、今尾（2000）、宮崎（2002）、Asano（2003））。
- (ii) 丁寧体の「です・ます」に接続する「な」は年配の男性にのみ使用される（伊豆原（1996）、宮崎（2002）、宮崎等（2002））。
- (iii) 「な」は聞き手と同等か、聞き手より年上、または社会的に上の地位にある話し手によってのみ用いられる（陳（1987）、伊豆原（1996））。

これらの点から明らかなことは、「な」の使用が、話し手の性別や年齢、社会的地位によって限定されるということであるが、これまでの研究では、なぜそのような現象が起きるのかは解明されていない。

もっとも単純な見方は、「な」の使用それ自体が、話し手の性別や年齢、社会的地位を直接示すのだとする見方であろう。しかし、そのようなアプローチは完全ではない。例えば、もし「な」の本質的機能に男性を示す機能が備わっているのであれば、「な」は無制限にいかなる男性によっても用いられ得るはずであるが、下の例(12)に見られるように男性だからといって誰でも使用できるというわけではない。

(12) A: 和也が抜ける来年が心配だな。

B: 俺もいなくなりますしね。 (*な) (T1)

この例では、中学校の野球部のコーチである男性 A がその野球部の選手である男子 B に対して「な」を使用している。それに対して、選手である B は「な」ではなく「ね」を使用して応答している。ここで注目すべきは、選手である B は男性であるにもかかわらず、「ね」の代わりに「な」を使用することは許されないということである (*俺もいなくなりますしな)。このことは、先行研究でも指摘されるとおり「な」が男性にのみ用いられるというのは事実であるが、男性表示が「な」の本質的機能ではないことを示していると言える。

では、年齢表示はどうだろうか。次の2つの例を比べてもらいたい。

(13) A: いやいや、見事、見事。

B: あ、校長先生。

A: これは夏が楽しみになってきましたな、西野先生。

B: まあ、期待しててください。 (T2)

(14) A: 俺んちのトイレの大きさだな。

B: あ、あんた、一体何しに来たのよ。 (HD2)

(13)では、中学校の校長である男性 A が野球部のコーチである男性教師 B に対し、丁寧体「楽しみになってきました」に「な」を接続させて発話している。この場合、先行研究で指摘されるとおり、たとえ話し手である A がどのような人物かという描写がなくても、年配で、しかも、ある程度の社会的地位がある人物だということが容易に推測できる。それに対し、次の(14)において A が使用した普通体「大きさだ」に接続した「な」は、特に話し手 A の年齢を示さない（年配であると特定できない）。実のところ、この話し手 A は、高校生である。まとめると、「な」は丁寧体に接続したときにのみ年齢を表示するのであって、普通体に接続した場合には、特定の年齢を示さず、しかも、「普

通体+な」は年配でも若者でも使用が可能なのである。よって、年齢表示も「な」の本質的機能ではないということになる。

ここで、第2節で提示した「な」の一般談話機能（情報・感情共有機能）とは別の固有談話機能として以下の(15)を提案したい。

(15) 「な」の固有談話機能

「な」は話し手の聞き手と「仲間意識」を共有しようとする態度を示す。

ここで言う「仲間意識」とは、話し手の「聞き手とは何かを分かり合えたり、分かち合えたりする関係である」または「聞き手は自分の言うことや気持ちを受け入れてくれる人物である」といった認識のことである。

次の第4節、第5節では、この「な」の固有談話機能が話し手のアイデンティティー表示にどのように関わっているのか詳細を見ていくことにする。

4. 「な」と話し手の年齢・社会的地位

この節では、「な」によって表される話し手の聞き手と「仲間意識」を共有しようとする態度が、どのように話し手の年齢・社会的地位の表示に関係しているのかを明らかにする。第3節でも見たとおり、話し手の年齢・社会的地位の表示に関しては「な」が普通体に接続するか丁寧体に接続するかが重要な鍵となっているので、ここでは便宜上「普通体+な」と「丁寧体+な」を分けて見ていく。

4.1. 普通体と「な」

まず、日本語における普通体と丁寧体の使用に関連して、いくつか重要なポイントをあげておく。一つ目は、日本社会では、話し手と聞き手の相対的な年齢や社会的地位がフォーマルに話すかインフォーマルに話すかという選択に重要な役目を担っており、一般的に聞き手よりも年下、若しくは社会的地位が下の話し手はフォーマルで丁寧な話し方をすることが要求されるということである（杉戸（1983）、水谷（1983））。二つ目は、日本語においては、普通体と丁寧体がフォーマリティのレベルを示す典型的な言語手段であり、全ての発話において普通体か丁寧体のどちらかを選択しなければならないということである。端的に言えば、フォーマリティのレベルが低い場合は普通体を、高い場合は丁寧体を使用するということである。これらのことが意味するのは、普通体が選択されるとき、話し手は聞き手と親しい関係にあるか、聞き手よりも年上、または、社会的地位が上にあるということになる。

これらのことは、さらに「な」の固有談話機能(15)との関連で言えば、話し手は聞き手と親しい関係にあるか、聞き手よりも年上、または、社会的地位が上にあるため、仲間意識を共有したいという態度を示しても問題がない（つまり失礼にはならない）ということを示唆している。先に見た「な」が普通体に接続した例(14)を再考してみよう。(14)は、高校生の男子 A が同級生の女子 B の家を訪れた際、リビングルームの大きさが

あまりにも小さかったため、自分の家のトイレの大きさと同じだと誇張して発話している場面である。

(14) A: 俺んちのトイレの大きさだな。

B: あ、あんた、一体何しに来たのよ。

A と B は同級生であり、かなり近い関係にあることから、A が普通体「大きさだ」を使用することは当然であり、さらに「な」を接続して仲間意識を共有したいという態度を示すことも自然である。では、この場面でこの「仲間意識を共有したい」という話し手 A の態度がどのような効果を生むのか少し見てみたい。「な」が持つ一般談話機能から、A は自分のコメント「A の家のリビングルームの大きさが自分の家のトイレの大きさと同じだ」を B と共有しようとしていることが分かるが、このような B にとってネガティブなコメントを共有しようとするのは、通常失礼だと解釈されるであろう。しかし、「な」の固有談話機能によって A の仲間意識を共有しようとする態度も示すことから、A が B がこのようなコメントでも受け入れてくれる親しい友人だと判断していることが暗示され、失礼と言うよりは、単にからかっているというニュアンスが醸し出されてくる。

もう一つ例を見てみよう。(16)は中学校の男性教師 A が前日野球の試合で活躍した男子生徒 B の健闘をほめている場面である。

(16) A: よう、上杉。すごかったな、昨日は。

B: あ、おはようございます。 (T2)

教師 A は高校生 B よりも社会的地位が上にあることから、普通体「すごかった」を使用することは可能であり、「な」を使用することで仲間意識を共有しようとしても何ら問題はない。先の 2.2.2 で述べたが、「な」には元来話し手の聞き手に対するフレンドリーな態度を示す効果があるが、「な」がさらに仲間意識を共有しようとする話し手の態度を示すことで、このフレンドリーな態度や気持ちはより強く表現され、(16)の場合では、教師 A の自分が教鞭をとる中学校で活躍する生徒 B を仲間として扱いたいという気持ちがよく表わされている。

4.2. 丁寧体と「な」

今度は丁寧体に接続する「な」を考察する。先にも述べたが、「な」が丁寧体に接続した場合、話し手が年配で、ある程度社会的地位がある人物であることが示されるわけだが、このメカニズムを「な」が持つ仲間意識共有機能から解明したいと思う。

もう一度思い出してもらいたいのだが、日本社会では、聞き手よりも年下や社会的に地位が低い話し手は、基本的にフォーマルで、丁寧な話し方をすることが要求される。このことは、そのような話し手は、仲間意識を共有したいという態度を表すことも、基

本的には許されないということを示している。なぜなら、そのような態度を表すことは、話し手の聞き手と親しい間柄にあるという判断が前提となっており、フォーマルとも丁寧とも解釈されないからである。ということは、「な」の使用は、話し手が聞き手に対して仲間意識を共有したいという態度を示し、フレンドリーな気持ちを伝えてもよい立場、言い換えれば、聞き手と親しいか、聞き手よりも年上、または、社会的地位が上にあることを暗に示していると言える。これが、陳（1987）や伊豆原（1996）が指摘するように、「な」が聞き手と同等か、聞き手よりも年上、または、社会的地位が上にある話し手によってのみ使用される理由だと思われる。先ほどあげた「な」が丁寧体に接続している例(13)を見てみよう。

(13)' A: いやいや、見事、見事。

B: あ、校長先生。

A: これは夏が楽しみになってきましたな、西野先生。

B: まあ、期待しててください。

(13)は、中学校の校長である A が、野球部の練習を見て、その野球部のコーチである B に、夏に行われる大きな試合が楽しみになってきたという気持ちを伝えている場面である。この二人の関係（Aは校長でBは部下である教師）から見て、AがBに対して「な」を使用することには問題がない。しかし、逆に、BがAに対し「な」を使用することは許されない。たとえBの発話「期待しててください」のように丁寧体を使用したとしても、それに「な」を接続させ「*期待しててくださいな」と言うことは、文法的にも意味的にも可能ではあるが、Aに対して不適切だと見なされてしまう。

さて、ここでの疑問は、なぜ「丁寧体」と「な」という一見相反する言語要素が共起するのか、その共起がどのように話し手の年齢表示と結びついているのかということであろう。先に、日本語では、丁寧体である「です・ます」形の使用は、その会話のフォーマリティーや丁寧さのレベルが高いことを示す代表的な言語手段であることを指摘した。もちろん、それで示されるフォーマリティーや丁寧さのレベルの度合いは、様々な要素、例えば、会話のトピックや場面、会話参加者間の関係などによって異なりはある。ただ、丁寧体が使用される場合は、その会話や会話参加者間の関係に比較的高いレベルのフォーマリティーや丁寧さが存在している、または、要求されていると言える。また、Ide（1990）によると、丁寧体使用の目的には二種類があり、一つは話し手の聞き手に対する deference（敬意）を示すため、もう一つは話し手自身の demeanor（品行、例えば、学歴の高さ、社会的地位の高さ、家庭環境の良さ、マナーの良さなど）を示すためということである。要するに、「な」が丁寧体と併用される場合、その話し手は、ある程度レベルが高いフォーマリティーや丁寧さが存在している会話であっても、「な」を使用して仲間意識を共有したいという態度を見せることが許される人物であり、さらに、そういった場合、丁寧体は聞き手に対する敬意を表しているとは考えにくく、話し手自身の品行を示そうとしていると考える方が妥当であるため、その話し手はそういった品行が備わった人物（少なくとも話し手はそう考えている）ということになる。そのよう

な人物は、一般的にかなり年配で、社会経験も豊富で、ある程度の社会的地位を持った人物に限定されてくる。つまり、丁寧体に「な」を接続させるというのは、年配の男性にとって、自分に対する自信や自分の社会的立場の高さを示しながらも、フレンドリーな気持ちを表現することができる好都合なストラテジーなのだと言える。

このことをよく表している例として以下の(17)を見てもらいたい。

(17) いやあ、実に見事なホームランでしたな。 (T1)

これは、高級車であるジャガーを運転する 60 歳ぐらいの紳士の、中学生の野球少年に向けての発話である。発話(17)の前に、話し手はその野球少年がホームランを打ち、そのボールが場外に駐車していた話し手の高級車のサイドミラーにぶつかったところを目撃した。丁寧体に「な」が接続した発話(17)は、その後の話し手に沸きあがった複雑な気持ちをうまく伝えていると思われる。一つは、中学生にしては大きくて見事なホームランだったという驚きと感動を少年と共有したいという気持ち、もう一つは自分の車がそのホームランのせいで傷つけられたことに対する怒りの気持ちを冗談ぽく伝えようとする気持ちである。前者は「な」の持つ一般談話機能（情報・感情共有機能）から表されるものであるが、後者は丁寧体に「な」を接続したことで示される気持ちであると考えられる。つまり、丁寧体に「な」を接続し、少年に対してフレンドリーな気持ちを表現すると同時に、自分の余裕や寛大さ（品行）を見せることで、「車のサイドミラーが壊されたぐらいで怒るような余裕のない人間ではないが、やはり普通、被害を受けたら多少は怒るでしょう」というふうに、怒りの気持ちを直接的に伝えるのではなく、冗談ぽく伝えようとしているのである。

5. 「な」と話し手のジェンダー

この節では、「な」と話し手のジェンダー表示の関係について見ていく。「な」は通常男性によってしか使用されないのだが、それはなぜなのだろうか。ここでは、「な」の持つ仲間意識共有機能が、日本のジェンダーに対する社会的・文化的価値観または概念と言える「男らしさ・女らしさ」とそれらの概念を言語化した「男ことば・女ことば」と密接に関連していることを示し、「な」と男性使用の関係を明らかにしたい。

日本で「男らしさ・女らしさ」という概念、そして、「男ことば・女ことば」という言葉の性差が形成されたのは、明治期（特に 1800 年代後半から 1900 年代前半にかけて）である。その頃、明治政府は国をこれまでの封建国家から近代国家へと変革するために、政治、科学、教育などあらゆる分野の近代化に着手していた。その近代化の過程で明治政府は、異なる藩に属していた人々を日本という国の「国民」として統合し、国家秩序を保つ必要性に直面したわけであるが、そこで重要な点は、男性と女性に異なる役割を担わせることで国民化（国家統一）を達成しようとしたことである。つまり、男性国民は労働力・兵力としての役割を、一方で、女性国民は儒教思想に基づいた良妻賢母（男性国民を支える妻と次代の労働者と兵士を再生産する母）としての役割を期待されたの

である。当然、この国民の性別化は、当時の教育改革にも大きな影響を及ぼし、1879年には男女共学が禁止され、特に女子に対する良妻賢母教育はますます強化されていくこととなった（Inoue (2002)、中村 (2005、2006)）。

良妻賢母教育において特に強調されたのは、礼儀作法と話し方に関する厳しい規範である。例えば、1900年に出版された教科書には女性は礼儀作法だけでなく話し方も丁寧でおしとやかでなければならないとある（Endo (2006)）。当時使用されていた女訓書にも、「女子は、挨拶・言葉遣い立居振舞など、総て温和にして愛敬あるべし。」（石川 (1977 : 111)）や、「婦人の辞遣いは、おとなしくしとやかに、耳立たぬを善しとす。・・・」（石川 (1973 : 356)）とある³。ここには、良妻賢母を「女らしさ」として概念化すると同時に、女性の言葉遣いを「女らしさ」（良妻賢母）の表現とみなし、「女ことば」をひとつの社会的カテゴリーとして構築していこうとする過程が見てとれる。つまり、「女ことば」は丁寧でおしとやかな話し方を指し、女性は良妻賢母であるために「女ことば」を使用して女らしく話さなければならないといった社会的規範が作られたのである。その頃の教育改革では「女らしさ」と「女ことば」の構築により重点が置かれていたように見えるが、それは同時に、「男らしさ」とそれを反映した「男ことば」の成立をも促すこととなった。「男ことば」は「女ことば」とは逆に、乱雑で荒っぽく力強いなどと特徴付けられるようになった（Ide (1982)、相澤 (2003)、陳 (2010)）。

さて、ここで、「な」の仲間意識共有機能と「な」の男性使用の関係性という本題に戻るが、いくつかの点に留意してもらいたい。まず、上で述べたように、「女ことば」とは日本女性によって用いられる言語形式として構築され、日本女性が日頃どのように話すのか、または、どのように話すべきなのかという社会規範として位置づけられてきたということ。また、鈴木 (1993) も指摘するように、丁寧な言葉遣いというのは、ことさら「女らしさ」を示す「女ことば」の中心的存在として扱われてきたということ。さらに、日本女性は男性と同じ地位や役割を主張するかわりに、男性を扶助する地位や役割を好みがちであったということ（Ide & McGloin (1990)）。これらの点からすると、日本女性が話すとき、彼女たちは、男性とは異なり、聞き手とある一定の社会的距離を置き丁寧だと見られることを期待されていた、または、むしろ好んでいたということになる。これは、「な」の仲間意識共有機能によって示される、話し手の聞き手と距離を縮め仲間になろうとする態度、と相反するのではないだろうか。要するに、「な」は「女らしさ」に欠けた、言い換えれば、丁寧さに欠けた言語要素であり、それが女性が原則的に「な」を使用しなくなった理由だと考えられる。また、逆に、「な」が「男らしさ」の概念と合致しているということで、「男ことば」として受け入れられるようになったとも言える。先にも述べたように、「男らしさ」と「男ことば」は乱雑、荒っぽい、力強いなどの特徴があるとされているが、これらの特徴からすると、「男ことば」は丁寧さに欠けているということになる。つまり、「な」の仲間意識共有機能が「男らしさ」を表現することのできる「男ことば」の一つとして日本語の中に位置づけられてきたことは十分に納得できるのではないだろうか。

³ 石川 (1973、1977) は中村 (2005 : 112) を参照した。

6. 結論

以上、「な」の談話機能と話し手のアイデンティティー表示の関係について述べた。結論をまとめると以下ようになる。

- (i) 「な」は話し手が聞き手と発話の内容や発話に込められた感情を共有しようとする態度を示すことで、聞き手を会話に取り込むという一般談話機能を持つ。
- (ii) 「な」の一般談話機能（情報・感情共有機能）によってもたらされる効果としては、語調を弱めたり強めたりすること、フレンドリーな語調を示すことからインフォーマルな会話でより頻繁に使用されることなどがあげられる。
- (iii) 「な」はそれ特有の、話し手の聞き手と仲間意識を共有しようとする態度を示すという「仲間意識共有機能」も持つ。
- (iv) 「な」の仲間意識共有機能は、日本語におけるフォーマリティーに対する社会文化的価値、つまり、「話し手と聞き手の相対的な年齢や社会的地位によってフォーマルに話すかインフォーマルに話すかが決定づけられる」と結びつくことで、話し手の年齢と社会的地位（丁寧体に接続すると、話し手は年配で、ある程度の社会的地位を持つ人物）を表示する効果を生み出す。
- (v) また、「な」の仲間意識共有機能は、日本のジェンダーに対する社会文化的概念「男らしさ・女らしさ」とそれらを言語化した「男ことば・女ことば」と関連して、話し手のジェンダー（男性）を表示する効果を生み出す。

日本語には、丁寧体の「です・ます」や普通体の「だ・る」、敬語、人称代名詞（僕、あたし、など）など、会話場面のフォーマリティーレベル、話し手と聞き手の関係、話し手のジェンダーなどを直接的に示すことができる様々な言語手段があることはよく知られている。これに対し、本稿の終助詞「な」の分析結果は、日本語の中には「な」（おそらく、フォーマリティーやジェンダーを示すと言われる他の終助詞も）のように、話し手のある特定の態度を聞き手に示すという談話機能によって、非直接的に話し手の年齢や社会的地位、ジェンダーを表示する言語手段もあるのだということを見せることができた。

また、本稿の分析では、ある特定の言語要素に付随した態度の意味や語調が、それが使用される社会で構築されたフォーマリティーやジェンダーに対する価値観・概念と結びつくことで、話し手が男性なのか女性なのか、聞き手よりも年上なのか年下なのか、若いのか年配なのか、聞き手より社会的地位が上なのか下なのか、といったことを示すことになるという、言語と話し手のアイデンティティー表示のメカニズムの一側面を垣間見ることができたのではないだろうか。

謝辞

本論文の執筆過程では、オーストラリア国立大学のヘイズキャロル先生、クロフトアダムさんにはいろいろと助言をいただいた。この場を借りて深く感謝の意を表したい。

参考文献

- 相澤真波 (2003) 「少女マンガにみる女ことば」 『明海大学日本語ジャーナル』 8 : pp. 85-99, 明海大学日本語学科.
- 伊豆原英子 (1996) 「終助詞「な (なあ)」の一考察—聞き手に何を伝えているのか—」 『名古屋大語・日本文化論集』 4: pp. 65-82, 名古屋大学留学生センター.
- 伊豆原英子 (2001) 「「ね」と「よ」の再再考」 『愛知学院大学教養部紀要』 49 (1) : pp. 35-49, 愛知学院大学教養部.
- 今尾ゆき子 (2000) 「終助詞「ナ」の機能」 『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』 7 : pp. 1-12, 鈴鹿国際大学.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」 現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 pp. 241-268, ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1997) 『情報のなわばり理論—言語の機能的分析』 大修館.
- 杉戸清樹 (1983) 「待遇表現: 気配りの言語行動」 水谷修 (編) 『話しことばの表現』 pp. 129-152, 筑摩書房.
- 鈴木睦 (1993) 「女性語の本質—丁寧さ・発話行為の視点から」 『日本語学』 12 (6) : pp. 148-155.
- 陳一吟 (2010) 「日本語終助詞におけるジェンダー—大学生の自然会話に焦点を当てて—」 『比較社会文化研究』 29 : pp. 61-70, 九州大学大学院比較社会文学部.
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」 『日本語学』 6 (10) : pp. 93-109.
- 中村桃子 (2005) 「言語イデオロギーとしての「女ことば」」 『語用論研究』 7 : pp. 109-122, 日本語用論学会.
- 中村桃子 (2006) 「言語イデオロギーとしての「女ことば」—明治期「女学生ことば」の成立—」 日本語ジェンダー学会 (編) 『日本語とジェンダー』 pp. 121-138, ひつじ書房.
- 蓮沼昭子 (1998) 「統一日本語ワンポイントレッスン」 『月間言語』 17 (6) : pp. 94-95.
- 水谷修 (1983) 「日本人の話ことばを考える」 水谷修 (編) 『話しことばの表現』 pp. 9-23, 筑摩書房.
- 宮崎和人 (2002) 「終助辞「ネ」と「ナ」」 『阪大日本語研究』 14 : pp. 1-19, 大阪大学大学院文学研究科.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 くるしお出版.
- Arndt, Horst and Janney Richard Wayne, 1987. *InterGrammar: Toward an Integrated Model of Verbal, Prosodic and Kinesic Choices in Speech*. Mouton de Gruyter, Berlin.

- Asano, Yuko, 2003. A Semantic Analysis of Epistemic Modality in Japanese. Ph.D Dissertation. The Australian National University, Canberra.
- Cook, Haruko Minegishi, 1992. Meaning of non-referential indexes: a case study of the Japanese sentence-final particle 'ne'. *Text* 12 (4): 507-539.
- Daneš, František, 1994. Involvement with language and in language. *Journal of Pragmatics* 22: 251-264.
- Endo, Oriie, 2006. A Cultural History of Japanese Women's Language. Centre for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.
- Ide, Sachiko, 1982. Japanese sociolinguistics: politeness and women's language. *Lingua* 57: 357-385.
- Ide, Sachiko, 1990. How and why do women speak more politely in Japanese? In: Ide, S., McGloin, H. N. (Eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Shuppan, Tokyo, pp. 63-79.
- Ide, Sachiko and McGloin Hanaoka, Naomi, 1990. Preface. In: Ide, S. and McGloin, H. N. (Eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Shuppan, Tokyo, pp. i-iv.
- Inoue, Miyako, 2002. Gender, language, and modernity: toward an effective history of Japanese women's language. *American Ethnologist* 29 (2): 392-422.
- Katagiri, Yasuhiro, 2007. Dialogue functions of Japanese sentence-final particles 'yo' and 'ne'. *Journal of Pragmatics* 39: 1313-1323.
- Lee, Duck-Young, 2002. The function of the zero particle with special reference to spoken Japanese. *Journal of Pragmatics* 34: 645-682.
- Lee, Duck-Young, 2007. Involvement and Japanese interactive particles 'ne' and 'yo'. *Journal of Pragmatics* 39: 363-388.
- Maynard, Senko K., 1989. *Japanese Communication: Language and Thought in Context*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Maynard, Senko K., 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam and Philadelphia.
- McGloin, Hanaoka Naomi, 1990. Sex differences and sentence-final particles. In: Ide, S. and McGloin, H. N. (Eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Shuppan, Tokyo, pp. 23-41.
- Ogi, Naomi, 2012. The interactional function of Japanese interactive markers 'yo' and 'sa'. *Linguistics and the Human Sciences* 5 (3): 329-349.
- Uyeno, Tazuko, 1971. *A Study of Japanese Modality: A Performative Analysis of Sentence Particles*. Ph. D. Dissertation. The University of Michigan, Michigan.

データ

- あだち充 (1992) 『タッチ』小学館 1巻-11巻.
- 神尾葉子 (1993) 『花より男子』集英社 1巻-20巻.
- 宇佐美まゆみ (2007a) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス-日本語会話 1』東京外国語大学.
- 宇佐美まゆみ (2007b) 『BTS による多言語話し言葉コーパス-日本語会話 1』東京外国語大学.

著者

小木直美はオーストラリア国立大学、ジャパンセンターのレクチャラー（Lecturer）である。研究分野は、談話分析、話し言葉の語用論（話し言葉と話し手のアイデンティティ表示との関係）、語学クラスにおける文化教授である。近年は、特に日本語の終助詞の言語機能と話し手のジェンダー表示の関係についての研究を行っている。